

# 「日本古典における人間と環境－平安貴族とその周辺－」

杉橋隆夫、佐古愛己、上島理恵子、井上幸治、宮田敬三

平信範(たいらののぶのり、1112～87)は、公家有職と行政の核心に通暁した院政期中級貴族・実務官僚である。彼が入手した有職・行政に関する精確かつ大量な情報は、その日記『兵範記』(『人車記』ともいう)に詳細に記されており、当該期歴史研究の根本史料として重要視されている。本プロジェクトでは、『兵範記』を素材として、院政期京都に関する様々な情報を発信することを目指し、①人名索引作成、②刊本デジタル化と校訂本の作成(断簡整理)、③『仮称:平安貴族の見聞地図(京都地図)』の作成、④原本伝来過程・写本系統の研究、⑤英語版『京都辞典』の作成からなる5つの調査研究を柱として活動している。また、日本史・史料学と理工情報系および地理学系プロジェクトとの共同研究という本プロジェクトの特色を生かして、諸方に利用しやすいデータベースを作成し、情報のビジュアル化を図ることによって、研究や学習のみならずエンタテインメントとしても広く利用に供することを目標としている。

2002・2003年度における本プロジェクトが遂行した主要な作業・研究は、『兵範記』人名索引の作成とデータベース化、刊本データベースの作成、同書の書誌学的考察である。併せて、日本史史料の情報処理技術開発に関する基礎的な研究を情報学系プロジェクトと、歴史地図作成に向けた準備作業を地理学系スタッフと、それぞれ連携して行った。いずれも、当プロジェクト研究を進展させるための基底的な調査・研究である。2004年度以降は、これらの研究の進展を図り、最終的にはCD-ROM化またはインターネット上での公開を目指して、その具体的準備作業を推進する。また、国際交流および京都に関する情報の海外発信という面でも活動を予定している。

上記5つの項目に関する、具体的な作業および調査研究の進捗状況と成果、さらに今後の計画は以下の通りである。

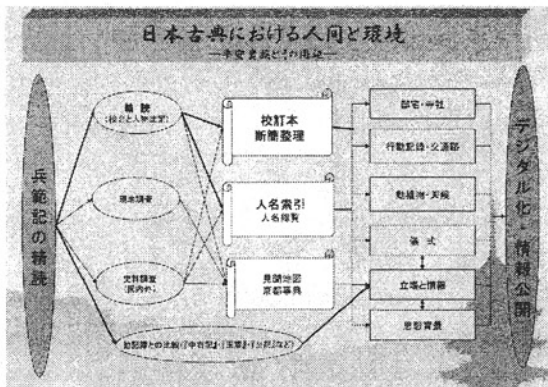
## ①『兵範記人名索引』の作成作業と索引のデータベース化

『兵範記人名索引』は、史料大成本『兵範記』(以下、刊本)と陽明叢書『人車記』・京都大学附属図書館所蔵『兵範記』および独自入手の写真帳(以下、三者をあわせて「写真版」と称する)によって、きわめて厳格な校合作業を行った上で、時期によって変遷する通称(官職名)などで記された人物の姓名を確定する作業を実施する兵範記輪読会(本プロジェクトの研究会)の成果である。既に活字媒体をもって公表済みの『兵範記人名索引』(以下、人名索引とする)中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『立命館文学』別巻、1987・91・99年)データのデジタル化については2003年度までに終了した。

引き続き輪読会において、『兵範記』第四・五巻に関する写真版と刊本の校訂および人名比定作業を行い、人名索引の完成を目指す。既に採集した人名はのべ約6千人、データ件数は約3万件に及ぶ。

作成済みの索引に関しては再度校合を行い、より精度の高い索引データベースの完成を目指す。

さらに、人名索引・刊本および地名情報を含めた



【本プロジェクト活動内容と作業の流れ】

データベースのCD-ROM化、あるいはインターネット上の公開に向けて、情報学系教員や情報処理関連企業と連携して、より便利で活用範囲の広い古記録索引データベースの構築を検討する。

## ②刊本デジタル化と校訂本の作成

(京都大学総合博物館蔵平松文書『兵範記』断簡整理)

情報学系プロジェクトおよび情報処理関連企業と連携して、史・資料のデジタル化、刊本データベース作成と古文書・古記録検索システム開発のための基礎的な調査・研究を推進した。2003年度までに、刊本を対象として、既存のスキャナとOCRソフトを用いた史料読み取りに関する問題点の調査を行い、手入力および外注を含めて、刊本のデジタル化を進めた。これと並行して、「外字」を含む史料(古文書・古記録類)に対する効率的な検索方法を開発するための調査を行い、『兵範記』を対象にして、人名・地名・建物・儀式など同一物の複数表記(呼称)に対する効率的な抽出方法や史料文言に対する概念検索システムの開発を目指している。その作業過程の一端は論文(前田亮・佐古愛己・杉橋隆夫「京都学デジタル図書館の構築と多言語情報アクセス」<『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』Vol.2003, No.21>)に記した。

また『兵範記』断簡復元に関しては、上横手雅敬氏による多年の研究成果の一部が既に『京都大学総合博物館図録 日記が開く歴史の扉』(2003年)で公表されており、近々その全貌が明らかになると仄聞している。本プロジェクトでは、かかる正統的学問手法による復元研究の成果に依拠しつつ、今後コンピュータを利用した補助機能の可能性(例えば、文字認識<大きさ・癖等>技術や、紙質の特長量抽出技術の進展)を模索して、汎用性のある基礎的な技術開発を検討したい。

2004年度以降は、以上の研究を継続するとともに、刊本データベースを早期に完成させ、自筆浄書本(写真版)との校合結果を反映させた校訂本および校訂本データベースの作成に取りかかり、最終的には、情報系プロジェクトの「京都学デジタル図書館」の一部分として公開する予定である。

## ③歴史地図『平安貴族の見聞地図』(仮称)の作成

既存の京都歴史地図の問題点(広範な時代の情報を一つの地図上に図示する点など)を踏まえて、『兵範記』の記主平信範が存命した12世紀の京都に焦点を絞り、当時の様子をできる限り詳細に再現した京都の歴史地図『平安貴族の見聞地図』(仮称)の作成を計画している。

2003年度末までに、先行研究(『平安京提要』、『平凡社日本歴史地名大系 京都市の地名』他)の成果をもとに、12世紀京都の地理情報をデータ化するとともに、『兵範記』を解読し、建造物・地点に関するデータを集積、地図作成のための基礎データの収集に努めた。同時に、『兵範記』に記載されている寺社や貴族の邸宅などを対象として、京都に現存する寺社、さらに邸宅などの跡地に建てられた石標と周辺の様子を撮影し、画像データとその解説文を収めた「解説シート」の作成を企画し、その準備に着手した。

また、地理学系プロジェクトの研究者と共同して、院政期京都の地形や土地利用に関する情報を組み込んだ地図を作成する基礎的な準備を実施。前述の地理データを平安京条坊の「町」単位に入力、さらに地形・土地利用状況を色分けして表示する二次元地図の完成を目指している。2003年度末現在の「平安貴族の見聞地図」のサンプルを末尾に添付する。この地図は、最終的には地理学系プロジェクト(GISバーチャル時空間研究プロジェクト)の3G京都(Virtual Kyoto)と連携させる予定である。

## ④『兵範記』自筆浄書本の伝来過程と『兵範記』写本系統の研究

『兵範記』自筆浄書本は、現在、陽明文庫と京都大学附属図書館に分蔵されている。前者は、信範が仕えた近衛家に伝わったものであり、後者は信範末裔の平松家の伝本が、明治43(1910)年同大学に寄託されたのに由来する。

この自筆浄書本は、いつしか平信範とその子孫の家主である近衛家が所蔵するようになっていたが、やがてその約半数を平松家が分蔵するに至った時期と由来については、西田直二郎氏・米田雄介氏等の論文に詳しいものの、いくつかの問題点も残されている。そのうち、近衛家から

平松家に分与された時期および背景に関して、新しい知見が得られた。その概要を以下に示す。



【自筆浄書本：陽明文庫所蔵『人車記』仁安3年12月16日条】

寛永(1624～44)末年から延宝年間(1673～81)において、本家西洞院家の当主が若年であったため、寛文元(1661)年以後一門の代表者として近衛家に奉仕していたのは平松時量であった。その時量が本記の譲渡を主家に願い出た理由は、平松家が西洞院家に比肩する地位を確実にするため、一門の「重書」を入手するところにあったと推測される。

また近衛家側の事情としては、当主近衛基熙の任左大臣拝賀・着陣儀に臨んで、懇切な指導と準備を行い、拝賀に扈從した柳原資廉と平松時量に、彼らの直接の祖先にあたる人物の日記を褒賞として与えることによると考えられる。これは、柳原に「永和一品記」を与えた際の、基熙の言葉(「今度種々入魂之間、予満足之余、譲遣」)から、類推可能である。

分与の時期については、新たに『基熙公記』延宝5年閏12月15～19日条に注目した結果、閏12月12日に平松時方を通じて、近衛基熙から譲渡する意向が伝えられると、翌日、父時量がその謝礼に参上し、15日から19日にかけて近衛家の文庫で『兵範記』自筆本の選定が行われたことが確認された。したがって、譲渡の日は従来指摘されていた延宝5年閏12月12日よりも後、自筆本選定以降のことと了解されるものの、厳密な時期や「譲遣」の実体などに関しては今後さらなる調査が必要と思われる。

次に、刊本の底本および写本研究に関する成果と課題について述べたい。

院政期歴史研究の根本史料として重要視されている『兵範記』の唯一の刊本である史料大成本は、

その解題によれば、自筆浄書本残存分はこれを底本とすると記されているものの、その信頼性への疑問は既に指摘されている(上横手雅敬「解説」<『陽明叢書16 人車記4』>)。本プロジェクトでは改めて浄書本(写真版)照合を行い、史料大成本における誤植・誤読・脱漏箇所を検討した。その結果、部分的には明らかに自筆本によらず、他の写本を底本としていると推察し、2003年度において史料搜索を施し、史料大成本は、国立公文書館内閣文庫所蔵の『兵範記』(秘閣本、函号161-68)を最も主要な底本としている可能性が極めて高いことが判明した。

また、秘閣本をはじめとする兵範記写本のなかで、近衛家系写本と江戸時代中期の公家野宮定基書写系統の写本とが広く流布している状況も想定される。今後さらに史料調査を継続し、奥書集成を作成して写本・伝来系統の復原研究を遂行する。また、浄書本分蔵の由来や写本の貸借状況についてもさらなる解明に努め、『兵範記』の書誌学的研究を総合的に進展させたい。

#### ⑤英語版『京都辞典』の作成

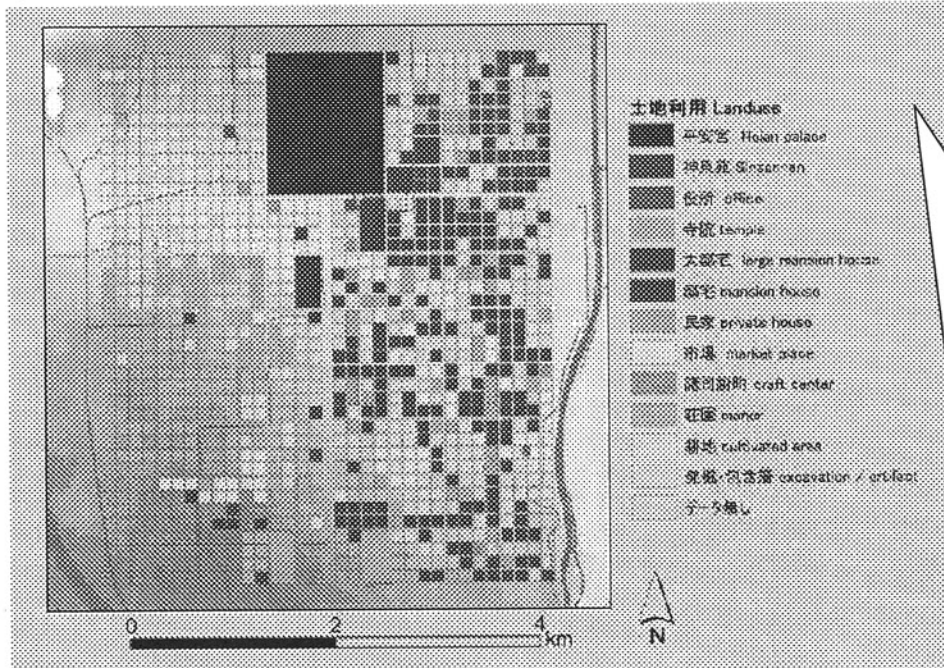
海外研究者の利用に資するため、写真・図版を大量に用いた英語版『京都事典』の編集を企画する。2004年度はその準備作業として、共同研究者であるプリンストン大学(アメリカ)のM. コルカット教授およびその研究グループと細部に互る企画調整に入る予定である。

この活動は、国際交流および京都に関する情報の海外発信を目指して、本プロジェクト単独の作業としてではなく、「京都アート・エンタテインメント創世研究」全体として進められるよう希望する。

本プロジェクトの主要な研究内容と課題は以上の通りである。本研究によって明らかとなる『兵範記』の情報を踏まえ、さらに同書とほぼ同時代の貴族の日記などから得られる情報を比較検討することにより、身分・階層差による情報の質・量の違い、思想や行動様式の差異、個性など人間類型を追究し、院政期貴族社会における情報収集・思想・環境の研究にも、本プロジェクトの研究成果が寄与できればと願っている。

「平安貴族の見聞地図(仮称)」(京都地図)

12世紀京都の土地利用図NO. 1(平安京部分)



データ

左右京、条・坊・町を単位として右表のデータを盛り込む。

※表の項目解説

・所在(左京=1・右京=2、条=1~9、坊=1~4、町=01~16)

・名称(『兵範記』もしくは『平安京提要』の表記による)

・建物分類(官衙・寺社・邸宅・市場…)

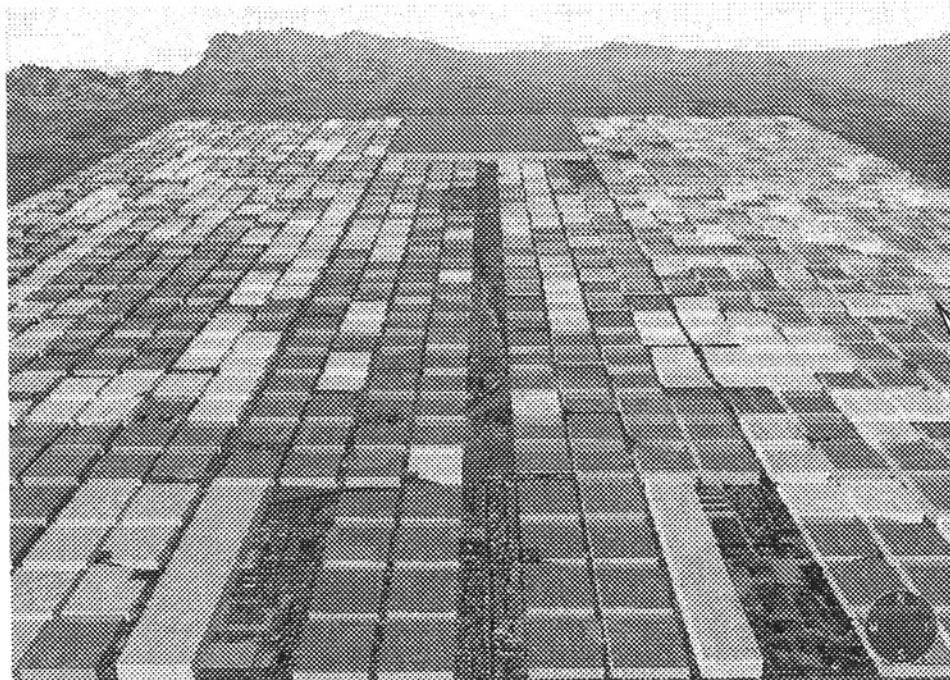
・規模(一町~一戸主)

・所在=条坊表記と現在地名表記(略)

・主=建物所有者(相続・売買関係が判明する場合はそれも記入)

・身分と主分類=主の身分・家格。天皇家=1、摂関家=2、公卿=3、中下級貴族=4、下級官人=5…

12世紀京都の土地利用図NO. 2(平安京部分)



左京七条三坊十六町  
『兵範記』記主平信範の邸宅があった。  
(『兵範記』仁平3年11月19日条による)

地図データ(一部抜粋)

所在	名称	分類	規模	主	身分	分類	備考	典拠
12406	冷泉高倉御所	邸宅	半町	藤原忻子	後白河天皇皇后	1	安元大火で焼失	『顯広王記』・『百練抄』治承元年4月6日条。提要。
12407	大炊御門高倉亭	邸宅	1町	藤原頼長	左大臣	2	書庫有。東方舎屋に右大将藤原実能・公能が、西方舎屋に頼長が居住。	『台記』久安元年4月2日条、『台記別記』久安4年8月9日条。提要。